2024 年 3 月 24 日
宮崎中部教会　棕梠の主日
牧師　乾元美

ゼカリヤ書 9：9～10
ヨハネによる福音書 12：12～16
「あなたの王が来る」

【招詞】詩編 68：20～21
【讃美歌】２５「父、子、聖霊に」
【詩編交読】詩編３２編
【赦しの宣言】イザヤ書 55：7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」
【讃美歌】２９４「ひとよ、汝が罪の」
【祈祷】天の父なる神さま
今朝も、わたしたちに新しい命、新しい朝、新しい主の日を備えてくださり、一人一人の名前を呼んで、この礼拝に招いてくださったことを、心から感謝いたします。
これから共に、聖書の御言葉を聞きます。聖霊なる神さまが、語る者、聞く者に豊かに働いてくださり、わたしたちの目を、耳を、心を開いてください。そして、御言葉を通して、あなたの恵みの御心を、深く悟ることが出来るよう導いて下さい。この礼拝の中心に、生きておられる復活のイエスさまがいて下さり、豊かな交わりに与かって、わたしたちの信仰がますます力強く励まされますように。そして、聖霊によって新しくされ、また新しく歩み出す一週間を、神さまの御心に従って歩む者とならせて下さい。
このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン
【聖書】ゼカリヤ書 9：9～10、ヨハネによる福音書 12：12～16
【説教】「あなたの王が来る」
＜棕梠の主日＞
本日は、棕梠の主日と呼ばれる日です。棕梠の主日とは、イエスさまがエルサレムに入られたことを記念する日のことです。この日から、イエスさまの十字架の苦難と死を覚える、受難週が始まります。
聖書では、イエスさまは、エルサレムに入られてから一週間の間に、裁判を受け、十字架に架けられ、死んで、お墓に葬られた、と記されています。
そして、棕梠の主日の翌週の日曜日に、イエスさまは死者の中から復活なさったのです。

さて、イエスさまがエルサレムに入られた、受難週の始まりが、なぜ「棕梠の主日」と言われるのか。それは、先ほど読まれた「ヨハネによる福音書」がもとになっています。
12：12～13 にはこうありました。「その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。』」

「棕梠」というのは植物の名前で、ここに出てくる「なつめやし」の別名です。ちょうど、わたしたちが街中でよく目にする、ヤシの木の仲間です。
棕梠／なつめやしは、当時の人々にとって、「勝利と平和」を象徴する植物でした。ですから、ある人が王様となって、臣下の礼を取る時や、家来として王様を迎える時。あるいは、戦に勝利した時の王様の凱旋パレードの時などに、棕梠の枝が使われたのです。
つまり、ここで「大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た」と書かれているのは、大勢の群衆が、イエスさまのことを、自分たちの王様として迎えた、ということなのです。

…では、わたしたちは、イエスさまのことを、どのような方としてお迎えすべきなのでしょうか。わたしたちにとっても、イエスさまは、王としてお迎えすべきお方なのでしょうか。そして、イエスさまは一体、どのような王なのでしょうか。
今日の棕梠の主日は、そのことについて、御言葉から示されていきたいと思います。

＜理想の王様＞
さて、イエスさまがエルサレムに来られる前。実は、一つの大きな出来事がありました。それは、イエスさまが、病気で死んでしまったラザロという人を、生き返らせたという出来事です。
そして、このイエスさまの驚くべき「神の力」を目の当たりにして、多くのユダヤ人たちが、イエスさまのことを「メシア」「救い主」として、信じるようになっていました。

当時、ユダヤ人たちと、彼らの都であるエルサレムは、圧倒的な軍事力を誇るローマ帝国の支配下にありました。ユダヤ人たちにとって、自分たちのイスラエル国家を失い、神の民でありながら、異教徒に支配されていること。これは、屈辱的で、耐えがたいことだったに違いありません。
しかし、旧約聖書の時代から、イスラエルの民には、いつかメシア、救い主が与えられる。彼らの王となる者が来る。そのような預言が与えられていました。
ですから彼らは、異教徒や敵をうち滅ぼし、自分たちの国を再び建て直し、力強く支配してくれる王さま、勝利のメシアが現れることを、心から待ち望んでいたのです。

そして、そのような中で、ラザロを復活させ、力ある業をなさる、イエスさまが現れたのです。
彼らは、このイエスさまこそ、預言者が語った、メシア、救い主、自分たちの王となる方に違いない。そう確信しました。
それで、イエスさまが、エルサレムの都に入られると聞いた大勢の群衆は、なつめやしの枝、つまり棕梠の枝を持って、イエスさまを迎えに出て、こう叫び続けた、とあります。
「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」

「ホサナ」は、ヘブライ語で、今、救ってください、どうぞ救ってください、という意味の言葉です。そして、この群衆の叫びは、詩編 128：25～26 から引用された言葉なのです。その詩編の箇所も読んでみます。

「どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。」

…実は、詩編は、ここで終わっています。つまり、群衆の叫びの最後の言葉、「イスラエルの王に」というのは、群衆が自分たちで付け足したのです。

そうです。大勢の群衆が期待していたのは、イスラエルの王でした。自分たちの国を打ち立ててくれる王でした。敵を滅ぼし、ローマ帝国の支配から解放し、ダビデ王やソロモン王の時代のように栄華を誇る、イスラエルの国を再建し、力強く支配してくれる、威風堂々たる王。それこそが、彼らが望む、勝利のメシアだったのです。

＜子ろばに乗るイエスさま＞

ところが、エルサレムに入って来られた、王なるイエスさまのお姿は、彼らの期待とは全く対照的でした。14 節にはこうあります。

「イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。『シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、／ろばの子に乗って。』」

イエスさまは、何と、小さなろばの子を見つけて、それにお乗りになったのです。

小さく、まだ重荷を背負ったことのない子ろばは、イエスさまを乗せて、よろよろ、ふらふら、覚束ない足取りで歩いたに違いありません。

それは、ローマ帝国をも打ち倒す勝利のメシア、権勢を誇る王の姿、とは程遠いもので、とても弱々しく、情けないような、惨めなお姿だったのではないでしょうか。

しかし、イエスさまが子ろばに乗られたのは、まさにご自分が、旧約聖書に預言された、まことの王であることを、明らかになさるためでした。

それは、15 節の次の御言葉が実現するためでした。

「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、／ろばの子に乗って。」

これは、先ほど読まれた、旧約聖書のゼカリヤ書 9：9 の御言葉です。こうありました。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」

イエスさまは、子ろばに乗られることによって、預言者によって語られていた、来るべき王、勝利を与えられた者が、確かにご自分であることをお示しになったのです。

そして、人々を救うために来るべき王たる方が、戦車や軍馬に乗って来るのではなくて、「子ろば」に乗って来られるということ。それは、この方がどのような王であるか、どのような勝利のメシアであるかを、よく現わしています。
それは、「高ぶらない」王であること。むしろ、低くへりくだられた、弱いお姿においてこそ、わたしたちの王となられる、ということです。

イエスさまは、確かにまことの王として来られました。しかし、イエスさまは、軍隊を率いて、敵から戦いで勝利を勝ち取り、人々を圧倒的な力で従わせる王として来られたのではありません。
先ほどのゼカリヤ書のところに、「彼は神に従い、勝利を与えられた者」とあったように。イエスさまは、むしろ、ご自分を、低くされ、小さくされ、父なる神さまの御心に従順に従われることによって、勝利を得られるお方なのです。

イエスさまが従順に従われた、その父なる神さまの御心とは。神さまの、わたしたちへの愛と憐みのゆえに、御子イエスさまが、わたしたちの罪を背負い、わたしたちの代わりに十字架で死に、すべての罪を償うということでした。そうして、わたしたちに永遠の命を得させて、神さまと共にいつまでも生きる者としてくださる。それが、父なる神さまの御心でした。

そしてイエスさまは、この父なる神さまの御心を、ご自分の心として下さり、わたしたちを最後まで愛し抜き、十字架の死に至るまで、従順に従い抜いてくださったのです。
そうして、御心に従い、わたしたちのために、十字架による罪の贖いを成し遂げられたイエスさまを、父なる神さまは、死者の中から復活させてくださいました。

このようにして、「高ぶることなく、子ろばに乗って来る」、低くへりくだられた、神の御子イエスさまは。父なる神さまの御心に従い抜き、まことの人となられて、十字架の苦難と死を歩み通し、わたしたちを完全に愛し抜いてくださることによって、罪と死に、完全に勝利なさったのです。
このようにして、イエスさまは、わたしたちを、愛と、赦しと、命によって支配してくださる、まことの王となってくださったのです。
「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る」。

改めて思えば、「ろば」は、人間の重荷を背負って運ぶ動物です。
まさにイエスさまは、ご自分の身に、わたしたち一人一人の罪の重荷を背負ってくださるために。そして、わたしたち自身を、まるごと担って、神さまの御許へと運んでくださるために。わたしたちのところに、低く降って来てくださったのです。

わたしたちは、この「子ろば」に乗られた、平和の王なるイエスさまが来てくださることによって。すべての重荷を下ろし、罪を赦され、傷を癒され、慰めを与えられ、罪の中から、死の中から、立ち上がらせていただくことが出来るのです。

＜王は誰か＞

エルサレムで、叫びながらイエスさまを迎えた、大勢の群衆は。確かにイエスさまを、約束された来たるべき王であり、まことのメシアである、と信じていました。

そして、確かにイエスさまは、来たるべき王であり、まことのメシアでした。

しかし、どのようなメシアであるか。どのような王として来られるか。それについては、群衆は、まったく自分勝手な理想像、自分の望むような国を実現する王さまを、思い描いていたのです。

そして、自分の理想と違うと分かると、彼らは手のひらを返して、この数日後にはイエスさまを犯罪人として扱い、「十字架につけろ。十字架につけろ。」そう叫んでいたのです。

…恐ろしいことですが、実は、わたしたちもまた、この群衆と同じようなところがあるかも知れません。

わたしの王となってくださるのならば、わたしのために、わたしの敵と戦って、勝利していただきたい。わたしの王であるならば、わたしを苦しめている者を滅ぼし、わたしの敵を打ち破り、わたしが平安でいられる、わたしの理想の国を築いてほしい。

わたしたちは、救いや平和を求めるとき、そんな風に、自己中心的な救いを思い描き、自分に都合の良い平和、自分の理想の王国が実現することを、願っているのではないでしょうか。

そして、そのような時、わたしたちはいつの間にか、神さまを差し置いて、自分自身を王さまとしているのです。神さまの御国、神さまのご支配、神さまの御心を退けて、わたしの思いをこそ、実現させようとしているのです。

さらに、そうやって、わたしたち一人一人が、自分の理想の国の王になることを求め、自分の思いを実現しようとするならば。わたしたちは隣人とも互いに争ったり。あるいは、自分さえよければ満足して、隣人の苦しみや悩みに無関心になったりして、一緒に愛をもって生きることができなくなっていきます。

…このように、神さまに敵対しているわたしたちに対して。隣人と敵対しているわたしたちに対して。もし、イエスさまが、大勢の群衆が望んだような王さまで、軍馬にまたがってこられ、兵を率いて敵を滅ぼし、力によって支配なさる方だったとしたら…。

…わたしたちは、きっと、あっという間に滅ぼされてしまうことでしょう。

しかし、イエスさまは、わたしたちを力で押さえつけて、支配したり、滅ぼしたりするようなことはなさいません。それは、神さまの御心ではないからです。

神さまは、そのような敵対するわたしたちをも、愛し続けて下さるお方です。そして、イエスさまは、その神さまとの和解を告げてくださるためにこそ、来てくださった、平和の王だからです。

ゼカリヤ書 9：10 にはこうありました。「わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」
イエスさまには、戦車も、軍馬も必要ないのです。むしろイエスさまは、それらを絶ち、諸国の民に、すべての人々に、神さまとの和解を告げ、地の果てにまで、愛のご支配をもたらしてくださる、平和の王なのです。

そのゆえに、イエスさまは、子ろばに乗って来られます。神の御子でありながら、自ら貧しくなり、小さくなり、弱くなり。敵対する人々とも、逆らう人々とも、罪人のわたしたちとも、どこまでも共にいてくださいます。
そして、わたしたちの罪と死の重荷をすべて背負い、最後には、ご自分の命を差し出してでも、わたしたちを救ってくださる。このわたしを愛するゆえに、わたしのために、喜んで十字架に架かって死んでくださる。
イエスさまは、その弱々しい、悲惨な、ボロボロのお姿によってこそ、わたしたちの罪の支配を打ち破り、愛によるご支配を実現して下さるお方なのです。

＜あなたの王が来る＞
「見よ、あなたの王が来る。」「見よ、お前の王がおいでになる。」
このようなお方が、わたしたちの王なのです。このようなお方が、わたしたちの救い主なのです。
そうであるならば、わたしたちは、自分が王であることを止めて、また世の虚しいものに従うのを止めて、このまことの王にのみ、従う者となりたいのです。

時に、世の様々な強い力が、わたしたちを支配し、覆い尽くし、打ち負かしてしまうように思われることがあります。
しかし、このイエスさまの愛と命のご支配のもとにあるならば。世のどんな嵐の中にあっても、この平和の王が、わたしを担い、どこまでも共にいてくださる、そのまことの平安を見出すことが出来るのです。
このまことの王のもとには、どんな悲しみや嘆きの中にあっても、その涙を拭い取って下さる、まことの希望と慰めがあるのです。
受難週、わたしたちの救いのために、子ろばに乗って来られたイエスさまを、わたしたちは主と仰ぎ、まことの王として、心からお迎えしたいのです。
「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗ってくる。雌ロバの子であるろばに乗って。」

【お祈り】
　天の父なる神さま
　受難週、わたしたちを、愛と恵みによって支配してくださるために、御子イエスさまが、低くへりくだり、苦しみと悩みに満ちた十字架への道を、歩んでくださいました。
　わたしたちの罪と死の重荷を負い、ご自分の命も惜しまず与え、救いの御業を成し遂げてくださるイエスさまが、わたしたちのまことの王となってくださいますことを、心から感謝いたします。
　これほどまでに、わたしたちを愛して下さる、神さまの御心を、わたしたちがいよいよ深く知ることが出来ますように。そして、イエスさまのお姿を見つめつつ、悔い改めと、感謝を持って、受難週の日々、心を主に向けて、祈りをもって歩ませてください。
　このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】３０９「あがないの主に」
【信仰告白】ニカイア信条
【十戒】
【献金】６５－１「今そなえる」
【主の祈り】

【祈祷】
天の父なる神さま
今週から、受難週の歩みが始まります。御子イエスさまが、ご自分の十字架の苦しみと死によって、わたしたちを罪から救うために、低くへりくだり、子ろばに乗った平和の王として来てくださったことを覚え、感謝し、み名を賛美いたします。
この受難週の日々、十字架のイエスさまのお姿を見上げつつ、一日一日、祈りをもって、悔い改めをもって、歩んでいくことが出来ますように、聖霊によってわたしたちを強め、導き、お支えください。そして、来る復活日、イースターには、罪と死に打ち勝ち、すべてに勝利なさったイエスさまを、多くの兄弟姉妹と共に心から礼拝し、喜び、賛美することが出来ますように。
神さま、今日ここに集うことのできなかった、愛する兄弟姉妹を覚えます。どうぞ、御言葉を届け、この礼拝の祝福と恵みに、共に与らせてください。体の弱さや痛みを覚えている者に、癒しを。悩みや困難を覚えている者に、導きを。信仰の弱さを覚えている者に、祈りと励ましをお与えください。また、愛する者を御許に送り、悲しみの中にある姉妹を覚えます。どうぞ、死にも勝利なさった復活の主の御手に、すべてを委ねて、あなたからの慰めと平安をいただくことが出来ますように。新たな歩みが、支えられ、守られますようにと、祈り願います。
また、この礼拝に、新しく招かれている方たちを覚えます。どうか、御言葉を通して、まことの神であるあなたを知ることが出来ますように。イエスさまの救いの御業を、自分の救いの恵みとして、受け入れることが出来ますように。聖霊なる神さまが、お一人お一人を、まことの信仰へと導いて下さいますように、お願い致します。
神さま、この世界においては、災害で、未だ悲しみと困難の中で生活をしている方々。また、戦争にあって、本当に悲惨な、残酷な状況に置かれている人々がいることを覚えます。どうか、憐れみ、助けてください。特に、小さい者、弱い者、年老いた者たちを、顧み、守り、お救い下さい。一日も早く、平和と癒しが与えられますことを、心から祈り願います。
また、ここにいるわたしたち一人一人も、隣人を覚えて、執り成し祈り、あなたの平和の使者として、用いていただくことが出来ますように。
そして共に、この地で、福音を告げ知らせ、悔い改めを叫びつつ、主に仕える諸教会の歩みを、どうか力強く励まし、導き、用いて下さいますように。
このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】２８「み栄あれや」
【祝福】主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン